

松岡壽『凱旋門』をめぐる

鐸木 道剛(岡山大学)

明治初期の画家たちは、黒田清輝以降の画家たちとは違ってパリだけでなく、ヨーロッパの様々な都市に留学していた。国沢新九郎や井上辨次郎のロンドン、川村清雄のヴェネチア、山本芳翠のパリ、松岡壽のローマ、山下りんのペテルブルグ、そして原田直次郎のミュンヘンである。

松岡壽(1862-1944年)が1880年から88年のローマ留学中に描いた油彩品のひとつに凱旋門を描いた小品がある(23.2x31.0cm)。東京芸大所蔵で、1882年との伝承がある。

ところが1989年に開催された岡山県立美術館での展覧会の際に同じ寸法(23.5x31.7cm)の同じ油彩画がもう一枚発見された。以来、岡山県立美術館の所蔵となっている。その新出の油彩画は清新な筆致を示し、従来から知られる芸大所蔵の油彩画の模写とは思えない。岡山の展覧会では並べて両者とも松岡壽の作品として展示した。ふたつの絵を前にして、新出の『凱旋門』の正体について、さらには芸大所蔵の『凱旋門』の再検討を含めて議論百出であった。どちらが先に描かれたか。場合によっては後に描かれたものは贋作となる可能性もある。模写作品としての特徴がどちらにあるか。この両者の場合、様式的観察によっては決着がつかない。

ところで、デュッセルドルフ画派の大家オズワルド・アッヘンバッハ(Oswald Achenbach 1827-1905)にも同じ凱旋門を反対側から描いた油彩画の小品がある(26.8x34.5cm)。右上に「Rom 19. Juli 82」との書き込みがあるから、松岡と同じ年に描かれた。松岡も当然戸外でスケッチするのは夏である。つまり同じ年の夏に凱旋門をはさんでドイツの55歳のリアリズムの大家と、20歳の小柄な極東からの若者がイーゼルを立てて絵を描いていたことになる。両者に直接の接触はないだろう。しかしここに描かれているハドリアヌス帝の噴水が松岡のふたつの『凱旋門』で如何に扱われているかをみれば、制作の時系列が決定できる。

さらに、アッヘンバッハはそれを1886年に大画面の油彩画に完成させている(120x149cm、ベルリン国立絵画館蔵)。松岡の『凱旋門』もまた完成作にすべくその場で描いたスケッチであったことに改めて気付かされる。

松岡にはどこかドイツの画家との関係が見え隠れする。ローマ滞在中の松岡の日記に「深切に世話をなしくれたり」と記されている「Widemenn」も、ドイツ人彫刻家金属細工師のWilhelm Widemann(1856-1915年、ローマ滞在1877-83年)と思われる。「松岡壽とドイツ」は新しい研究テーマであり、今後の調査が待たれるところである。